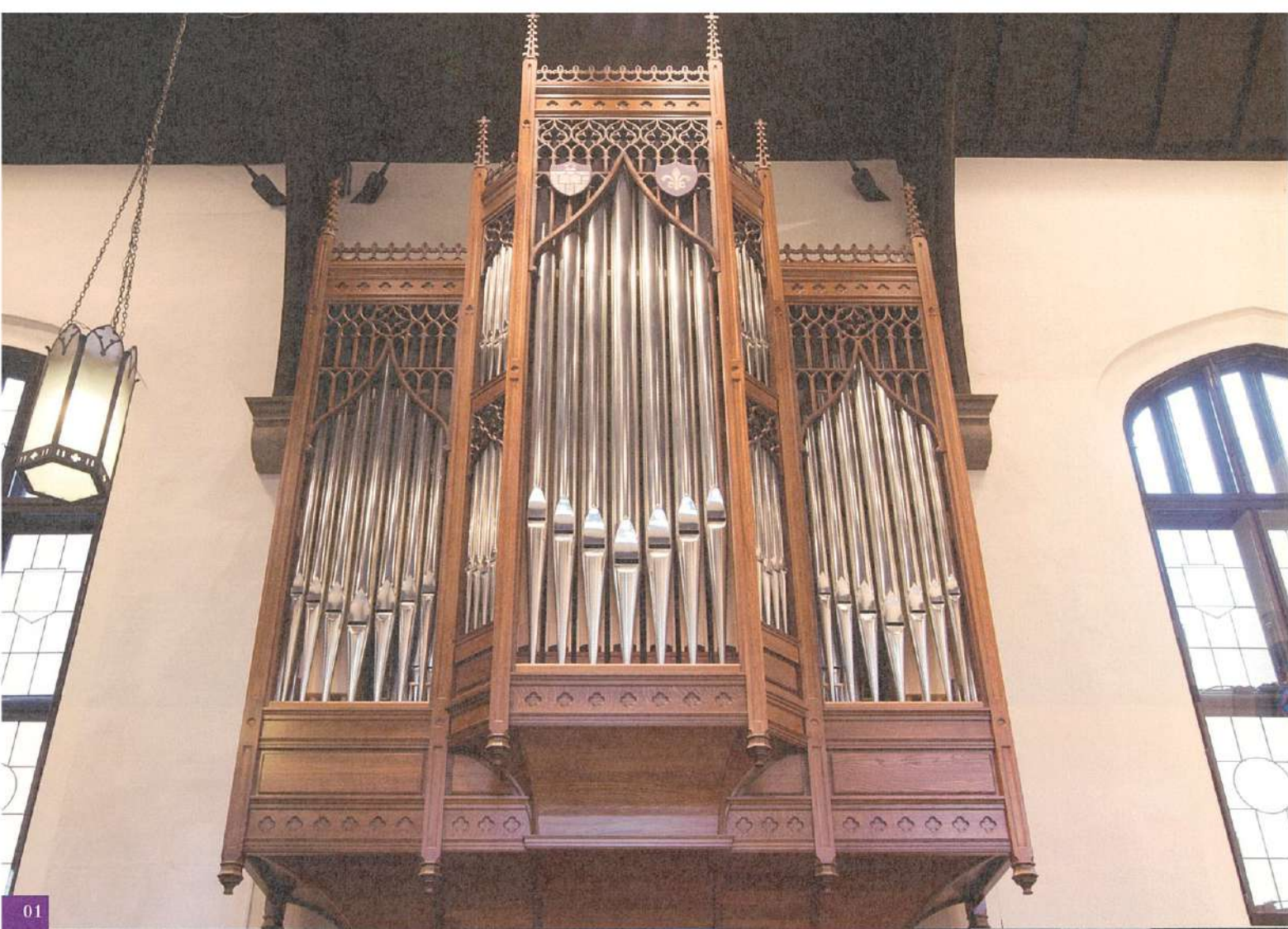




立教の新しいパイプオルガン

Rikkyo's New Chapel Organ





01



オルガンの選定にあたって

立教学院教会音楽ディレクター
立教大学文学部キリスト教学科教授
スコット・ショウ



2002年、立教大学に赴任した時、諸聖徒礼拝堂と聖パウロ礼拝堂にはパイプオルガンとポジティブオルガンが、それぞれに存在していた。一見、十分な環境に思えたが、実は多くの問題を抱えていた。ベッケラートオルガンはバッハの作品を弾き得るネオ・バロック様式の楽器で、チャペルの礼拝音楽を支えるには不十分であり、オーバーホールの時期にあった。ヴァルカーオルガンは建物に対して規模が小さく、電気系統が頻繁に故障し始め、早急な対策が必須であった。

立教学院オルガン委員会は、両方の楽器の状態について専門家に調査を依頼し、改善に向けていくつかの提案をした。数年間に及ぶ詳細な検討と協議の末、両チャペルに新しいオルガンを設置することが決定されたが、重要な課題が残った。「最も適した楽器」の選択である。

立教学院の二つのチャペルが必要とする音楽とは、何か。第一に考慮すべきは、チャペルが属するアングリカン教会、それに連なる日本聖公会である。日本聖公会は立教創設者であるアメリカ人宣教師ウィリアムズ主教の伝道により、設立された。我々の出発点である聖公会の礼拝における、オルガンの最も重要な役割は、会衆賛美を支えることである。『日本聖公会 聖歌集』のほぼ半数が、英国及び米国の19～20世紀初頭にかけて作られた聖歌であり、新しい聖歌もこの時代の形式を踏襲したものが多い。オルガンは、何よりもこれらの聖歌を伴奏できる楽器でなければならない。加えて立教には、英国ケンブリッジやオックスフォードの大学チャペル・クワイアの伝統を汲む充実した聖歌隊があり、95年の歴史を誇っている。週3回の礼拝に加え、特別礼拝や式典で奉唱している60名の聖歌隊員の音楽を支える楽器であることが不可欠だ。

では、英国聖公会のオルガンとは、どんな響きを持つのか。一言でいえば、人の声を圧迫しない心地良い響きである。声と同じ高さの音色が多彩に揃い、高音は軽やかで、低音が充実し、豊かで深みのある、包み込まれるような響きである。スウェル・ペダルによって強弱の調節も容易で、ささやくような音色から堂々たるフォルテまで、オーケストラのようにスムーズに音量を変えることができ、伴奏する際の自在な強弱が可能である。この様式のオルガンは、残響の豊かな大きな空間にも、乾いた響きの小空間にも適しており、低い音域の16フィートに8フィート、4フィートのストップを重ねて音量を増大させることも特筆すべきだろう。以上の理由から、英国ロマン派様式のオルガンこそ、池袋のチャペルに最適であることは明らかであった。

新座チャペルの楽器については、より柔軟な選択が可能であった。幸い、オルガンにとって理想的なバルコニーが新たに設置されることになり、豊かな残響空間に合わせて、フランス・ロマン派様式に決定された。早速、欧米のオルガン製造会社を視察に行き、多くの楽器について検討を重ねた末、イギリスのティッケル社とアメリカのフィスク社に依頼することが遂に決議されたのである。

設置工事を終えた今、2台の新しいオルガンは日々の礼拝や行事に使用され、本来の目的が果たされていることをここにご報告でき、とても嬉しく思う。今後、何世代にも亘って人々に演奏され、聴かれ、愛され、立教学院の働きに役立つことを心から願っている。

年表・立教学院オルガン史

- 1874年 明治7年2月3日、アメリカ聖公会の宣教師ウィリアムズ (Channing Moore Williams, 1829-1910) が、東京・築地の開市場内に「ボーイズスクール」を開設。数名の生徒で始まった私塾が、立教の礎となる。
- 1882年 12月19日、居留地37番に、米国聖公会の宣教師及び建築家で立教の校長ガーディナー (James McDonald Gardiner, 1857-1925) の設計により、レンガ造りの校舎と寄宿舎を兼ねた、ウィリアムズが「築地で最もハンサムな建物になるであろう」と期待した新校舎が竣工。(写真①)
- 1894年 6月20日、大地震により校舎が崩壊。11月22日、居留地57～60番に、ガーディナーの設計による、六角塔を備えた堅牢な新校舎と寄宿舎の定礎式が行われる。1899年に完成。(写真②)
- 1910年 池袋に校地を購入。
- 1916年 5月29日、校舎群とチャペルの定礎式が行われる。(写真③)
- 1918年 9月、池袋へ移転。
- 1919年 5月31日、ニューヨークのマーフィー・アンド・ダナ建築事務所の設計によるゴシック様式煉瓦造りの校舎群とチャペル「諸聖徒礼拝堂」の落成式が行われる。(写真④)
- 1920年 1月25日、チャペル聖別式が行われる。立教大学初代聖歌隊長・オルガニストのガントレット (George Edward Luckmann Gauntlett, 1868-1956) により、アメリカのエステイ社 (Estey Organ Company) 製のオルガン (2段鍵盤、ペダル付、8ストップ、Opus 1598) が設置される。この楽器の一部は、ウィリアムズ主教の後継者マキム主教 (John McKim, 1852-1936) の夫人、故ネリー・マキムを記念して、アメリカ聖公会ニューヨーク教区婦人補助会から1917年に寄贈された。(写真⑤、⑥)
- 1923年 9月1日、関東大震災が発生。チャペルやオルガンは、他の校舎同様に甚大な被害を受ける。
- 1925年 11月7日、チャペルの修復が完成し、感謝礼拝が行われる。
- 1942年 キリスト教主義教育の放棄。チャペルは閉鎖され、「豊島区の非常食料の保管庫」として使用される。
- 1945年 敗戦後、チャペルは再開され、キリスト教主義教育が再生される。
- 1959年 新座校地を取得。
- 1960年 新校舎建設に伴い、立教高等学校が新座校地へ移転。
- 1963年 4月25日、新座校地に、レーモンド (Antonin Raymond, 1888-1976) の設計による鉄骨鉄筋コンクリート造の立教学院聖パウロ礼拝堂が落成し、聖別式が行われる。カラーガラスは、神の栄光を象徴している。(写真⑦、⑧)
- 1965年 3月1日、聖パウロ礼拝堂にヴァルカー・マイヤー社 (Walcker-Meyer, オーストリア) のオルガン (2段鍵盤、ペダル付、11ストップ、パイプ747本) の祝別式が行われる。(写真⑨)



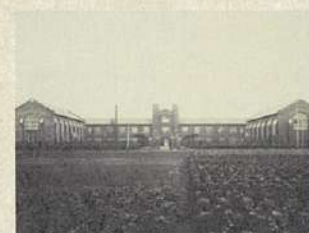
(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)

- 1972年 諸聖徒礼拝堂のエスティオルガンが、暖房による極度の乾燥が原因で不調をきたし始める。
- 1981年 3月、諸聖徒礼拝堂にベッケラート社のポジティブオルガンが設置される。
- 1982年 10月、諸聖徒礼拝堂にベッケラートオルガンが設置されることが決定し、契約が結ばれる。
- 1983年 3月19日、エスティオルガンについての調査報告書がまとめられる。8月25日、解体されたオルガンの部材が、博物館明治村にあるウィリアムズ主教ゆかりの聖ヨハネ教会堂に移される。(写真⑩)
- 1984年 7月7日、学院創立110周年を記念し、諸聖徒礼拝堂にベッケラート社 (R. v. Beckerath Orgelbau, 西ドイツ) のオルガン (3段鍵盤、ペダル付、25ストップ) が設置され、オルガン祝別式が行われる。(写真⑪)
- 1994年 ベッケラートオルガンのオーバーホールが行われ、ペダルにファゴット16'が増設される。
- 2000年 ヴァルカーオルガンについての調査報告書が提出される。
- 2002年 聖パウロ礼拝堂に、木村オルガン工房のポジティブオルガンが設置される。
- 2003年 オルガン委員会が「音楽環境の改善向上に関する要望書」を学院に提出する。
- 2007年 「音楽環境の改善向上に関する要望書II」が作成され、ヴァルカーオルガンとベッケラートオルガンの両方を新しい楽器に入れ替えることが提案される。
- 2009年 6月5日、理事会で両チャペルに新しいオルガンを建造することが承認される。
- 2010年 諸聖徒礼拝堂に英国ティッケル社 (Kenneth Tickell & Company Ltd) のオルガン、聖パウロ礼拝堂に米国フィスク社 (C. B. Fisk, Inc.) のオルガン導入が理事会で承認され、両社と契約が結ばれる。
- 2013年 4月11日、ベッケラートオルガンの撤去作業が始まる。2014年7月にチャペル会館2階のマグノリア・ルームにリメイクして設置される。7月22日、ヴァルカーオルガンのパイプ撤去作業を行う。演奏台と数本のパイプは、立教学院展示館 (2014年5月9日に開館式) に保管される。7月14日と21日、コンテナでティッケルオルガンの部材が運び込まれ、組立と整音作業が開始される。9月11日、コンテナでフィスクオルガンの部材が搬入され、組立と整音作業が開始される。ティッケルオルガンOpus 79が諸聖徒礼拝堂に完成し、9月27日に「祝別の祈り」が捧げられる。
- 2014年 フィスクオルガンOpus 141が聖パウロ礼拝堂に完成し、1月27日に「祝別の祈り」が捧げられる。



(7)



(8)



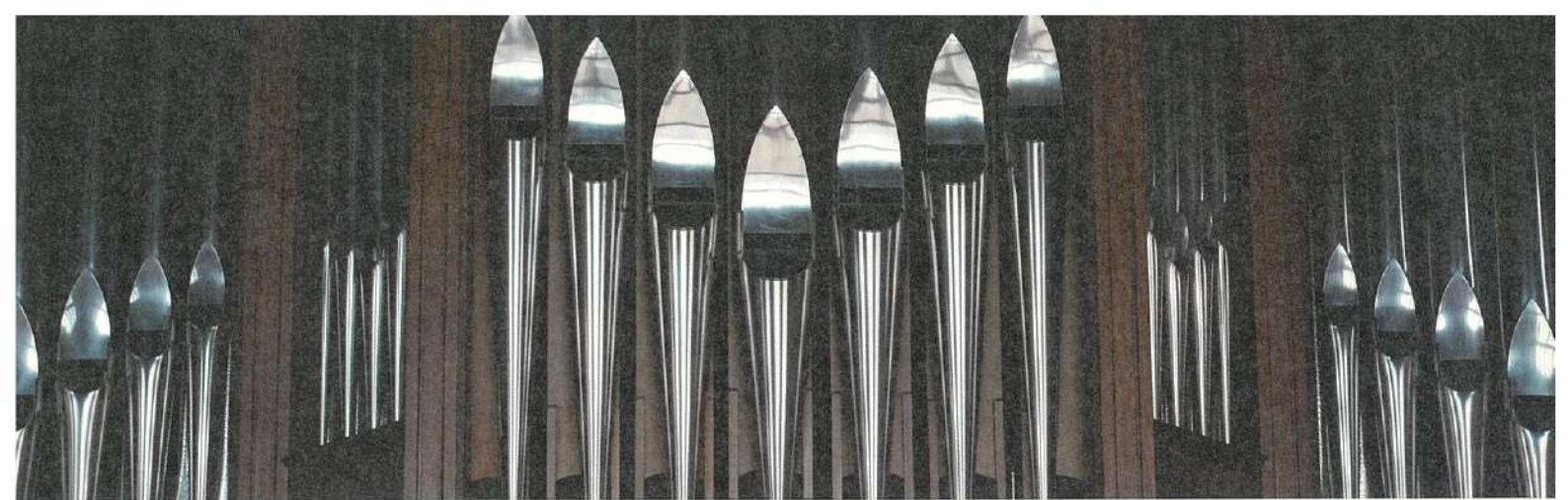
(9)



(10)



(11)



Tickell Organ

立教学院諸聖徒礼拝堂の パイプオルガン

ケネス・ティッケル社 社長
ケネス・ティッケル



立 教大学のショウ教授から、諸聖徒礼拝堂に導入する新しいパイプオルガンの計画についてご相談をいただいたのは、2009年9月のことです。当時、チャペルに設置されていたドイツ製のネオバロック・オルガンを新しい楽器と入れ替えることになり、イギリス製でイギリス・ロマン派様式のものを採用したい、というお話でした。

その中で、立教学院が英国国教会の流れを汲んでいること、そして特に、このチャペルでは聖歌隊の活動が重視され、また高く評価されていることを知りました。聖歌隊は英国の教会音楽を主要なレパートリーとしているため、オルガンもこの聖歌隊を支える楽器が望ましい、とのことでした。東京には既に様々な時代様式のオルガンが点在しているので、諸聖徒礼拝堂のオルガンは本来の利用目的である聖歌隊アンセムの伴奏に主眼を置き、特に英国教会音楽のオルガン作品にも対応できるようにしたいということで、いただいた説明資料には、2段の手鍵盤、足鍵盤、30前後のストップを備えた暫定的なオルガン仕様書も含まれていました。

幸い、ショウ教授は研究休暇のため2009年の秋をケンブリッジで過ごされていたので、私たちは直接このプロジェクトについて意見を交わすことができたほか、オックスフォードとケンブリッジに設置された数台のオルガンと、ウースター大聖堂のクワイア・オルガン、ロンドンにあるリンカーン法曹院のチャペルなど、当社製の楽器を実際に見学し、試奏していただきました。

諸聖徒礼拝堂では、イギリスの多くの教会と同様に、祭壇に向かって左手（教会建築では北とされる側）の壁にオルガン室が設けられています。既存のオルガンはチャペル前寄りに置かれ、室内にせり出しているほか、一番長いパイプを用いる8フィート・ストップが比較的少なく、またパイプ群を縦に分ける配列の仕方も手伝って、背後にあるオルガン室の奥のスペースが一部未使用となっていました。中の仕切り壁と上部の床板を撤去すれば、オルガン室全体を利用できる、と伺いましたが、その際、気をつけなければならないのは、「オルガン室シンドローム」と呼ばれる問題です。



Tickell Organ

パイプオルガンは、理想的にはオープンスペースに自立させ、建物の長軸方向に向けて音を響かせるのがよいとされています。これに対し、配置が横向きの場合やパイプが奥まった場所に収納されている場合、楽器本来の音のインパクトを実現するには、かなりの工夫を要するのです。

そこで、8フィートと16フィート・ストップのパイプ群に割り当てるスペースを増やすほか、充実したスウェルボックスも設けようと考えました。それには、オルガン室のスペースを最大限に活用する必要があります。また、チャペル内の全会衆をリードするクリアで存在感のある音と、聖歌隊の伴奏にふさわしいソフトで伸びやかな音色をどう兼ね備えるかも大きな課題です。

これを解決する手段として、オルガンケースをチャペル側に設け、これにグレート（第1鍵盤）のパイプとペダル・ストップのパイプの一部を収納して配置することを提案しました。設置場所の上部空間は、屋根を支える2本の腕木に挟まれています、その間隔も高さも十分あります。これをうまく利用すれば、希望どおり、新しいオルガンがまるでチャペルの建設当時からあったかのように建物にじっくり馴染むはずで、スウェルボックスはオルガン室の中に設置してシャッターを開口部近くに設け、スウェルの奥には、大型のペダルパイプを配置しようと考えました。

最初の想定では手鍵盤は2段でしたが、私はこれを3段とすることを提案しました。こうすれば、ソロ・ストップを3つ追加できます。どのストップも高い風圧を要しますが、必要な風量はそれほど多くないので、他の2段の鍵盤と同様に心地良いタッチが得られるはずで、提案したTromba、Clarinet、Harmonic Fluteのストップは、いずれもきわめて有用な8フィート・ストップです。構造的には、ソロとスウェルの風箱を一つにまとめ、TrombaとHarmonic Fluteをスウェル・シャッターの前に、Clarinetはボックス内に置いて、グレート（第1鍵盤）ないしスウェル（第2鍵盤）のより静かなストップで伴奏を付けられるようにします。

こうして特殊なストップの構成が固まると、後の仕様はすんなりと決まっていき、著名なイギリスのオルガン製作者ウィリアム・ヒルの作風を思わせるものとなりました。バラエティに富んだ8フィート・ストップと、これをしっかりと支える16フィート・ストップが、高い親和性を発揮します。グレートのプリンシパル・コーラスは、開放的なOpen Diapasonからよく調和するMixtureまで、幅





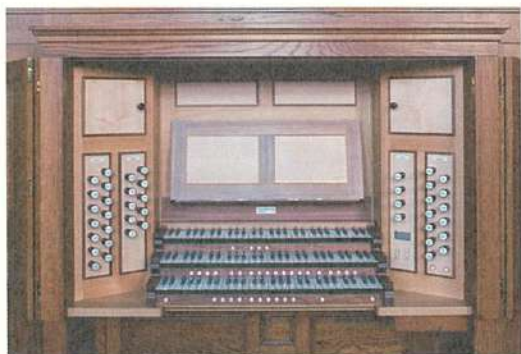
Tickell Organ

広く充実した音色を備えます。これに対し、スウェルのDiapasonはスケールの狭いものを用い、低音域のMixtureはリード管と調和する音色です。両鍵盤とも、フルートとストリングの音色を備えています。W. ヒルが好んだ先細のGambaは小音量のDiapasonとして、あるいは他のストップと組み合わせて使えるので便利です。聖歌隊の伴奏を重視する観点から、スウェルのストリングにはまろやかな音のSalicionalを選びました。また、レパートリー対応力を高めるSesquialteraをスウェルに加えました。これにより、19世紀イギリスでしばしば見られた特徴的な長3度の混合が可能となり、リード管の音ともよく調和します。

こうしたスタイルのオルガンは、スウェルのリード管コーラスはグレートが鳴っている間はほとんど聞こえないほどですが、シャッターを開くにつれてクレッシェンドし、全開するとグレートをしのぐほどの音量になります。リード管は、グレートに特徴あるPosaune（ペダル・ストップでも利用可）、スウェルのContra Fagotto、Cornopean、Oboe、そしてペダルのTromboneがあります。

オルガンケースの材質はヨーロッパ・オークで、着色して磨きをかけてあります。色は、説教壇や会衆席などと釣り合いがとれ、黒みがかった壁板ともコントラストが強くなりすぎないよう、濃い目の色調を選びました。磨き上げられた正面のパイプは錫製で、濃い色のオーク材ケースに収めると、さらに見栄えがします。ケースにはめ込まれた演奏台は、メープルとアメリカン・ブラックウォールナットです。鍵盤とストップノブは、伝統的な黒檀と動物の骨を使っています。キー・アクションとペダル・アクションはすべて機械式で、ストップ・アクションは電気式です。楽器の調律には、平均律からやや外れた当社独自の音律を用いています。

オルガン本体は、イギリスのノーサンプトンにある当社の工房で2012年末から



2013年6月初旬にかけて製作され、入念に梱包して3つのコンテナに収め、東京へと発送されました。当社の4人のビルダーが来日し、組立と整音の作業に熱心に取り組みつつ、池袋での生活を大変満喫しました。

オルガンは、昨年9月末の完成の後、日々の礼拝やコンサートに幅広く活躍しています。

SONATA

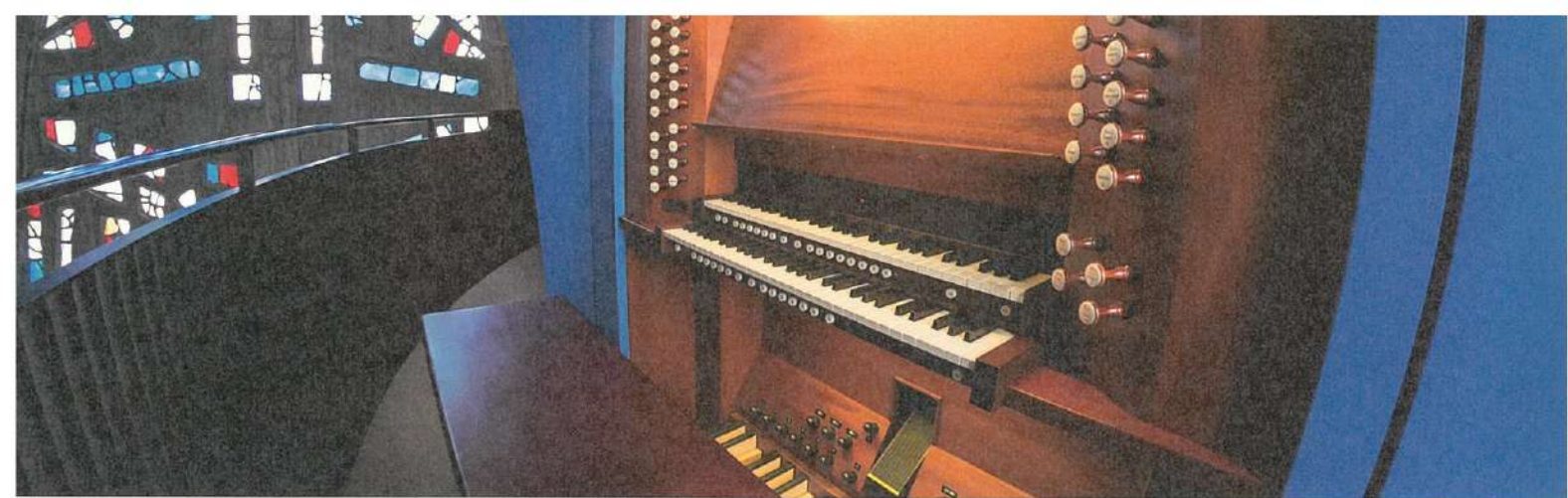
I

Herbert Howells

ティッケルオルガン ストップリスト

Kenneth Tickell & Company Ltd opus 79

I Great (第1鍵盤) C-a3		Pedal (足鍵盤) C-f1	
1. Double Diapason	16'	25. Open Wood	16'
2. Open Diapason	8'	26. Sub Bass	16'
3. Stopped Diapason	8'	27. Principal	8'
4. Gamba	8'	28. Open Flute	8'
5. Principal	4'	29. Octave	4'
6. Harmonic Flute	4'	30. Trombone	16'
7. Fifteenth	2'	31. Posaune	8' (from No. 9)
8. Mixture III	1 1/3'		
9. Posaune	8'		
Tremulant			
II Swell (第2鍵盤) C-a3		Swell to Great	
10. Geigen Diapason	8'	Solo to Great	
11. Gedackt	8'	Great to Pedal	
12. Salicional	8'	Swell to Pedal	
13. Voix Céleste	8'	Solo to Pedal	
14. Principal	4'	Mechanical key action	
15. Rohr Flute	4'	Electric stop action	
16. Flageolet	2'	8×200 general combinations	
17. Sesquialtera II	2 2/3'	9×6 Great divisional combinations	
18. Mixture III	2'	9×8 Swell divisional combinations	
19. Contra Fagotto	16'		
20. Cornopean	8'	製作	
21. Oboe	8'	Kenneth Tickell & Company Ltd	
Tremulant		ケネス・ティッケル社 (英国)	
III Solo (第3鍵盤) C-a3		組立	
22. Harmonic Flute	8'	Kenneth Tickell & Company Ltd	
23. Clarinet	8'	ケネス・ティッケル社	
24. Tromba	8'	パイプ数 1,899本	
Cymbelstern		調律法 Brown	
		設置年月 2013年9月	
		座席数 250	



Fisk Organ

立教学院聖パウロ礼拝堂の パイプオルガン

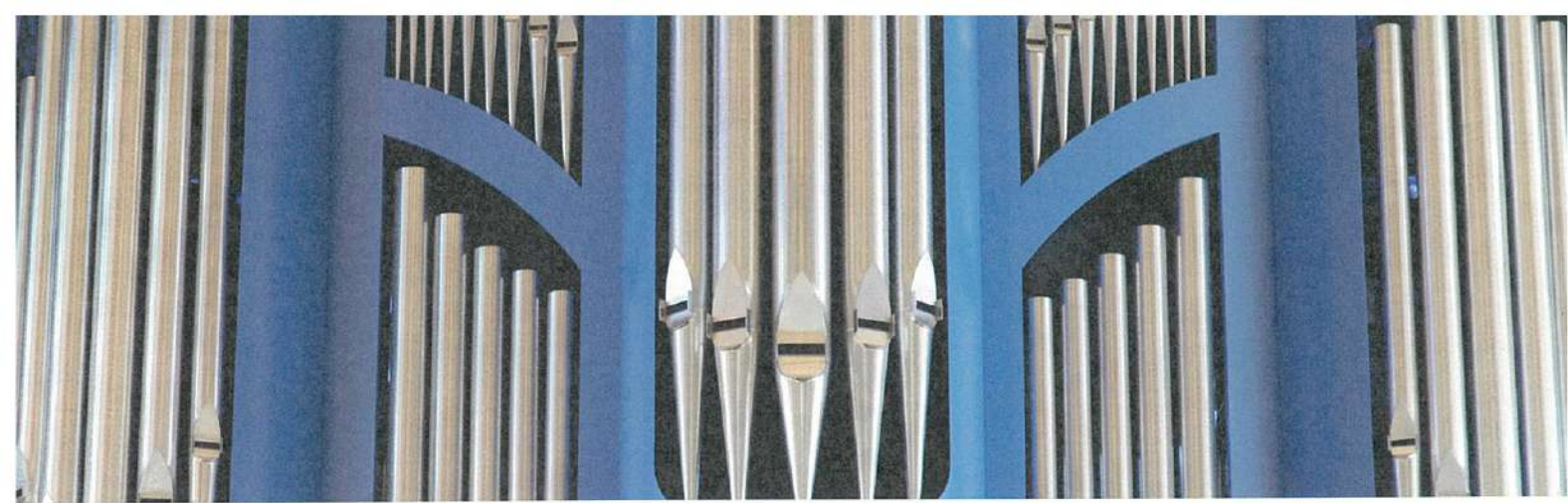
C.B.フィスク社 社長
スティーブン・ディーグ



新 座キャンパスにある聖パウロ礼拝堂を最初に訪れたのは、2001年6月のことでした。人目をひくこの建物は、訪れる人を内へと誘い込むような神秘性を湛え、足を踏み入ると、アーチ形の天井と明るい陽の光を受けた色ガラスが織りなす想像力あふれる空間に、心を奪われました。その後、この建物に導入するパイプオルガンの設計を担当することになった私たちフィスク社は、レーモンドの設計したチャペルに劣らない斬新で興味の尽きない楽器を創ろう、と決意しました。

まず、チャペル後部の1/16モデルを作成し、当社で35年にわたって務めてきたオルガンのデザイナーがさまざまなスタイルのオルガンケースの図案を描き、このモデルに合わせてみました。明らかなのは、この楽器には平凡なデザインではなく、より彫刻的な要素が求められる、ということです。高く丸みを帯びた天井に調和する形状が望ましく、長方形の平面的デザインが入り込む余地はない、と思われました。オルガンケースを三次元的なデザインにする場合、自然な木目仕上げでは不釣り合いなので、塗装された木製ケースを提案しました。実際、チャペル内の木製部分は入り口の扉、会衆席、内陣の備品などに限られているので、木目仕上げのケースでは明らかに違和感があったのです。コンクリートと同じグレーか、あるいは色ガラスに使われている原色を用いるのが最良と判断し、候補の4色を立教学院オルガン委員会でご検討いただいた結果、ブルーが選ばれました。これはチャペル前方の壁の色とも調和します。演奏台は、会衆席と同じ色に塗ったマホガニーが使われています。バルコニーの柵は、色を演奏台に、形をオルガン本体に合わせ、黒塗りのスチールにマホガニーの羽目板を組み合わせています。

正面に露出するファッサードパイプの材質は、光沢の強い純粋な錫ではなく、錫50%、鉛50%の合金を選びました。この混合比にすると、表面に独特のまだら模様が出るからです。鑄造した合金をハンマーで叩いて整える過程で、表面に細かい面が数多くでき、これがチャペルの窓から入るさまざまな色の光を受けて面白い効果



Fisk Organ

を生み出し、光の当たり具合によってオルガンの見え方が変わってくるのです。並んだパイプの歌口は、チャペルの形状に合う美しい曲線を描いていますが、これはフィスク社製オルガンの特徴でもあります。

ケースのデザインと並行して、プロジェクト・マネージャーがオルガンケース内に収める各種パイプや機構を整理し、将来の地震にも耐えられる構造設計を進めました。そして、立教の関係者を交えて慎重に検討を重ねた結果、バルコニーの形が決定されました。サイズは控え目にし、オルガン本体、演奏者とアシスタント1人が乗るスペースだけを確保します。視覚的かつ耐震構造の観点から、チャペル内への張り出しは必要最低限にとどめるのが望ましく、その結果、心地よい浮遊感をたたえたバルコニーの上にオルガンがしっかりと収まりました。バルコニー下の両脇には、それぞれ小さな機械室を設け、片方には送風機をはじめとするオルガン用の装置が、もう片方にはバルコニー用の空調設備が収められています。オルガンの調律を安定させるためには、温度を一定に保つ必要があります。特注の空調・空気循環ユニットを導入し、オルガン内部にダクトを通して垂直方向の空気流を作り、上下の温度差をなくすよう図りました。

オルガンの内部は、地震対策の為に当社の手がける通常のオルガンよりも鉄骨を多用しました。鉄骨フレームは日本の技術者の検査を受け、鉄骨をチャペルの床や背後の壁と接合する工法についてもその認証を得ています。

Opus 141の音色については、すでに池袋キャンパスの諸聖徒礼拝堂で導入が進んでいたイギリス様式のオルガンとは対照的に、フランス様式でまとめることが決まっていました。そこで、ショウ教授と当社のトータル・ディレクター、整音師らを交えて協議を重ね、仕様を固めていきました。手鍵盤はグランドルグ（第1鍵盤）とレシ（第2鍵盤）の2段とし、これにペダルが加わります。オルガンケースの最上部には、正面と左右に開閉シャッターを備えたボックスを設け、ここにレシ用のパイプを収めます。オルガニストは足鍵盤のすぐ上にあるペダルでこのシャッターの開き具合をコントロールし、音量を自在に調節することができます。シャッターが3面に設けられているので、これを全開にすればパイプの音が遮られずに大きく鳴り響き、逆に閉じると、耳を澄まさなければ聞こえないほどになります。





Fisk Organ

このオルガンの音色設計の起点となったのは、18世紀と19世紀に活躍したフランスのオルガン製作者、クリコとカヴァイエ=コルの手によるオルガンです。時代を超えて今も愛される彼らの名器には、フランス古典派とフランス・ロマン派のオルガン製作のエッセンスが詰まっています。今回設計したオルガンのバックボーンをなすグランドルグのフルー管コーラスは、古典派の系統に沿ったもので、フランス古典派のレパートリーはもちろん、バッハやブクステフーデなど、その同時代の作品にも適しています。

1,786本のパイプはすべて、米国マサチューセッツ州グロースターにあるフィスク社のパイプ工房で合金の溶解・鋳造から一貫製造し、予備整音を済ませました。オルガンの組立てが完了し、設置が終わった後、数カ月をかけてすべてのパイプの最終整音が行われました。音響を考慮しながら、整音師がパイプ一本一本の音色を整えてバランスをとり、さらに全体的な響きを仕上げる、という根気のいる作業です。

整音責任者の濱田南海（はまだ なみ）は東京出身で、ボストンのニューイングランド音楽院でオルガンを学んだ後、15年近く当社のオルガン技術者として勤務し、今回この重要な役割を任されました。オルガン製作のあらゆる工程に習熟しており、また整音に不可欠な研ぎ澄まされた聴覚にも恵まれています。Opus 141の製作に取りかかる直前の1年間、フランスの著名なオルガン製作者のもとへ出向し、新しいオルガンの製造や、歴史的オルガンの修復、クリーニング、保守などの作業に携わり、その貴重な経験が、この楽器に大いに役立っています。

フィスク社では、「パイプオルガンとオルガン音楽の普及」を使命のひとつに掲げています。私たちは、心に響く音色と美しさを備えたオルガンの製作に心血を注ぐとともに、その教育や啓蒙にも貢献したいと考えています。このオルガンの蒔く種が、老若を問わず人々の心に根付き、末永く魂を息づかせる糧となることを、心から願ってやみません。



Prélude

フィスクオルガン ストップリスト

C. B. Fisk, Inc. opus 141

I Grand Orgue (第1鍵盤) C-c4

1. Bourdon	16'
2. Montre	8'
3. Flûte à fuseau	8'
4. Flûte harmonique	8' (bass from No. 3)
5. Prestant	4'
6. Flûte ouverte	4'
7. Doublette	2'
8. Fourniture IV-V	1 1/3'
9. Trompette	8'

Pédale (足鍵盤) C-g1

22. Resultant	32' (from No. 24)
23. Contrebasse	16'
24. Bourdon	16' (from No. 1)
25. Octave	8'
26. Bourdon	8' (extension of No. 1)
27. Octave	4' (extension of No. 25)
28. Bombarde	16'
29. Trompette	8' (extension of No. 28)

II Récit (第2鍵盤) C-c4

10. Viole de Gambe	8'
11. Voix céleste	8'
12. Bourdon	8'
13. Dulciane	4'
14. Flûte octavante	4'
15. Nasard	2 2/3'
16. Octavin	2'
17. Tierce	1 3/5'
18. Plein jeu IV	2'
19. Basson	16'
20. Trompette	8'
21. Hautbois	8'

Récit / Grand Orgue

Grand Orgue / Pédale

Récit / Pédale

Récit / Pédale 4

Trémolo

Vent flexible

Mechanical key action

Electric stop action

12×256 combinations

6 Grand Orgue divisional combinations

8 Récit divisional combinations

製作 C. B. Fisk, Inc.

C. B. フィスク社 (アメリカ)

組立 C. B. Fisk, Inc.

C. B. フィスク社

パイプ数 1,786本

調律法 Fisk II

設置年月 2014年1月

座席数 340

Tickell Organ

2013年7月～9月



搬入作業(1)



搬入作業(2)



搬入作業(3)



搬入作業(4)



搬入作業完了



チャペル内の部品群



演奏台



オルガン室組立作業



演奏台背部



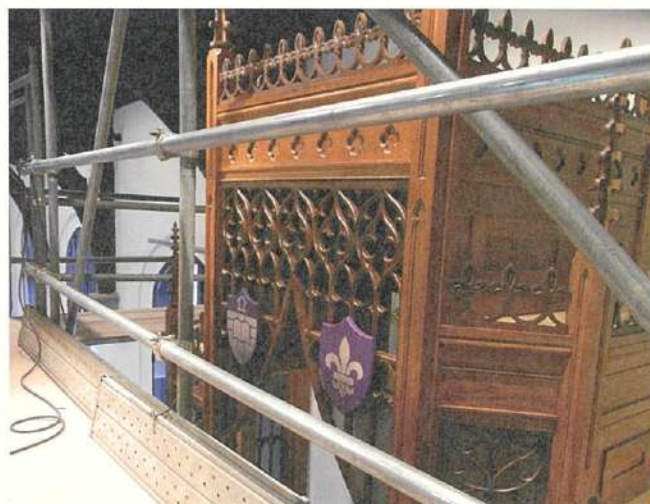
オルガン室



オルガンケース



送風管取付



立教エンブレム



パイプ群



整音作業

Fisk Organ

2013年9月～2014年1月



搬入作業(1)



搬入作業(2)



搬入作業(3)



搬入作業完了



チャペル内の部品群



オルガン内部の鉄骨



組立作業(1)



オルガンケース



組立作業(2)



リフトで部品運搬



パイプ群(1)



整音作業(1)



整音作業(2)



整音作業(3)



パイプ群(2)



学 校 法 人

立教学院

<http://www.rikkyogakuin.jp>

2014年5月15日発行

立教学院オルガン委員会

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1